

「循環型社会」めざす大木町に

地先進エネ再生 独の村から視察

「脱原発」を掲げ、再生可能エネルギーの依存度を高めるドイツから6日、ゴミの資源化や自然エネルギー普及などの循環型社会をめざす大木町に視察団が訪れた。8日まで滞在し、町内の施設見学や住民との交流をする。

視察団は、ドイツ南部にあるザンクト・ペーター村の幹部ら8人。人口約2600人のこの村は、地域独自の再生可能エネルギーに力を入れている。村全体で必要な電気の3倍もの発電量を、村内の太陽光発電やバイオマス発電などで確保できるといふ。

東日本大震災による福島第一原発事故を契機に、ドイツは2022年までの「脱原発」をめざしているが、そのドイツの中でもザンクト・ペーター村は「バ

イオエネルギー村」と呼ばれるほどの先進地という。一方の大木町は、生ゴミやし尿、浄化槽汚泥などをエネルギーや有機肥料として循環活用するまちづくりをめざしている。生ゴミなどから電力や液肥などを生み出すバイオマスセンターを06年にオープンさせた。

町役場で開かれた歓迎式典では、石川潤一町長が「地域住民と農家が協力して地域の循環システムを作り上げた。16年度を目標にゴミの焼却や埋め立てをしない町をめざしている」と説明。ルドルフ・シュウラー第一村長は「村民の参加で、地域熱暖房などのプロジェクトを実現できた。ここでの3日間のプログラムが楽しみだ」と述べた。

一行はさっそくバイオマスセンターを視察。発電量の変化やバイオガスの発生システムなどについて、町職員に質問していた。

バイオマスセンターを視察するドイツのザンクト・ペーター村幹部ら＝大木町横溝

